一茶の抵抗

――その滑稽味をめぐって――

小嶋孝三郎

1

元禄の蕉風俳諧に於ける風雅の美が「幽玄・閑寂・枯淡」にあり、天明期の俳諧が、華麗巧緻鋭敏等、都会人的洗練による「幻想とロマンの耽美的傾向」にあり、そうしたものをほぼ蕪村が代表していたとするならば、化政度の野人一茶の俳諧は果して如何なる美を追求したのであろうか。一茶の本領如何。以下私は、子規の一茶観を緒として話を進めて行こうと思う。

子規の一茶観は、明治三十年刊、「俳人一茶」（宮沢義喜、宮沢岩太郎共著）の附録にある「一茶の句を評す」（子規全集、第四巻、五六七―五七〇頁）に窺うことが出来る。

子規は先ず最初に次の様に言っている。

天明以後俳諧壇上に立ちて、特色を現した者を、奥の乙二、信の一茶とす。一茶最も奇警を以て著る。俳句の実質に於る一茶の特色は、主として滑稽、諷刺、慈愛の三点にあり。中にも滑稽は一茶の独擅に属し、しかも其軽妙なること、俳句界数百年間、僅かに似たる者をだに見ず。（全集、五六七頁）

こうした子規の一茶観は、今日の一茶観からすれば、相当大きな隔りがある。しかし乍ら、これは一茶の特に目につき易い一面を最も端的に捉えている。例えば「一茶最も奇警を以て著る」と見たのは子規の炯眼と云えよう。次に「俳句の実質に於ける特色」と云ったのは表現の形式に於ける特色に対して云ったものであるが、その特色として取り上げた三つの点の中、「滑稽は一茶の独擅に属し、云々」と云った批評は既に成美の一茶評以来、惺庵西馬（「おらが春」跋文）、一具（弘化版「一茶句集」）の評等に窺われる言葉である。従って、子規の一茶観は成美以来の一茶観を踏襲しているものと見てさしつかえないであろう。

子規の列挙した句は次の様なものである。

春雨や喰はれ残りの鴨がなく
下谷一番の顔して更衣
大根引大根で道を教へけり
寒念仏さては貴殿でありしよな

次に、子規が「滑稽の方便」即ち、滑稽を表わす形式的特色として「擬人法」を挙げ、その例句として、

罷り出でたるは此藪の墓にて候
名月の御覧の通り層家かな
行く秋を尾花がさらば〳〵かな　（外三句）

又、俗語使用の例として、

昼の蚊やだまりこくつて後から　（外三句）

新調（七五五・十六字調・変調）として、

桜々と唄はれし老木かな
目ざす敵は鶏頭よ初時雨
きり〳〵しやんとして咲く桔梗哉
下谷一番の顔して更衣

等をあげ、

この外滑稽ならぬ意匠の句にも、猶多少の滑稽を帯びたるは、其滑稽に深きがためなるべし。例句、
陽炎や手に下駄はいて善光寺
春日野の鹿に嗅がるる袷かな
朝顔や人の顔にはそつがある
一文に一つ鉦打つ寒さかな

等を列ねている。

右はいずれも子規のいう様に、一応「軽妙」であり、「滑稽味」を有する。例えば「春雨や」の句では「喰はれ残りの」といった着想に現実的生活体験的傾向が強く出ており、「下谷一番」の句は、当時「手鞠唄」に歌われた俗謡の文句を引用したとは云え、「下谷一番の顔して」といった破調もあずかって、これを「一茶自身の姿」と見ても、「他人の姿」と見ても面白い。又「大根引」の句は、柳樽に、

引んぬいた大根で道を教へられ（明和二年酉年刊「柳多留」初編、宝暦十一年の万句合）

とある川柳を、又「寒念仏」の句は、

寒念仏首じっけんの時もあり（明和五年子年刊「柳多留」三編、明和元年の作）

という川柳の「滑稽味」を一層具象化したものと云えよう。

「擬人法」を用いた三句の用例は、宗因の「花むしろ一見せばやと存じ候」「秋やくるのう〳〵それなる一葉舟」等で知られる談林調と云えよう。「昼の蚊や」の句は「卑怯者を諷刺」している様なところもあり、以下の句にもそうした多少の「諷刺性」を感ずるものが多いのは一茶の一特色であろう。

しかし乍ら、今それなら、これらの諸句によって、真に一茶の本領を云々することが出来るかというと、それは全

く無理な話である。何故なら、現存する一茶の俳句は、最も確実な資料のみに拠つても、正に二万句に近く、芭蕉の千余句、蕪村の三千余句に比較するならば、大きな差がある。而も彼には数十年に亘つて書き続けられた日記があり、その文章や連句・俳諧歌等があり、その様な尨大な量にのぼる一茶の芸術の中から、単にこれらの一握りの作品を取り上げて、彼の芸術を批判するという様なことは、全く一茶に対する甚だしい冒瀆と云わねばならない。

まして子規の様に、「滑稽」ということを、積極的に解明する態度に欠け、単に意味による滑稽、修辞による滑稽、新調による滑稽、稍深味のある滑稽といつた様な程度の区別を施しているけれども、凡そこの様な単純な分析からは、一茶の境地に、真に正しい批評を下すことが出来なかつたのも当然であろう。

しかし、それはそれとして、兎に角、一茶の俳風に於ける特色としての「滑稽味」ということは、その夥しい量にのぼる彼の作品の大きな部分を占め、これを決して見逃すことは出来ない様である。従つて、茲に一茶の本領を究明する出発点として、先ずその「滑稽的要素」に関して分析しておく必要があろうと思う。

2

もともと「俳諧」は「滑稽」から出発している。江戸初期の俳諧は「卑俗な滑稽」であり、貞門の俳諧は修辞による「智的な重苦しい滑稽」であり、談林は「暴露的な穿ち」にその滑稽味を見出していた。ところが芭蕉は、その様な智的遊戯的な滑稽を排して、世阿弥の所謂「まこと」を根抵としたをかしみ、生活の中からにじみ出て来る性格的個性的なをかしみにその美を見出したと謂われている。

問題は一茶の滑稽味が、そうした伝統俳諧にみるをかしみを如何なる形で継承し発展せしめているかということである。

ところで、室町時代の階級差・身分差によつて生じた対立関係が、狂言にみられる滑稽諷刺の文学を発達させた様に、江戸時代の武士と町人の対立関係は、前時代に比して一層顕著となり、深刻となつていた。従つて、この時代は表面的にはあく迄武士階級の支配の下に、儒教的な倫理道徳が君臨していたのであるが、一方、商業資本主義の発達に伴つて抬頭した町人階級は、そうした思想と相納れず、寧ろ抑圧された感情のはけ口を求め、自由奔放な享楽生活に走つた。又幕府の権力による圧政が行われると、庶民達も決して敗けていず、彼等の裏面を発き、その醜態を嘲笑し、諷刺や皮肉によつて自らを慰めた。川柳・狂歌・黄表紙・洒落本・滑稽本等の現実暴露的諸文学の盛行がそれを物語つている。

今、一茶の作品の中から、そうした現実暴露的なものを拾つてみると、

僧正の野糞遊ばす日傘哉（文化元年）

は、蕪村の「大とこの糞ひりおはすかれ野哉」の枯淡的句品と格段の差があり、その醜悪・尾籠・不快さは、全く悪趣味と云わざるを得ない。が、一方、蕪村の場合は焦点がぼやけていて、稍逃避的態度と見做されるのに対して、一茶の場合は頗る現実的である。尤も、その後、

春風や大宮人の野雪隠（文化十二年）

僧正の頭の上や蝿つるむ（文政八年）

等の句になると、流石に十年二十年の歳月は、この野性の俳人の泥くささを洗い流している。ともあれ、「僧正」や「大宮人」を、地上の人間世界迄引きずり降して、その正体暴露を試みている点が、そのをかしみであり、一茶の人間的階級的なめざめによる抵抗を物語つている。

女郎花あつけらこんと立りけり（文化十三年）

今この句を芭蕉の「ひよろ〳〵とこけて露けし女郎花」と比較してみると、前者には、潤いがなく、無造作でぶつきらぼうな感じがあり、残暑の白日の下、埃まみれになつた女郎花を思わせる。然るに後者の方はどうであろうか。その女郎花の生命の潤いばかりでなく、芭蕉の生命の潤いというか、その洗練された感情のゆらぎとしてのをかしみが感じられる。前者を以て、浅い、通俗的だ、趣味がない、蕪雑だといつて、それを一笑に附してしまうならばそれ迄である。旧来の伝統的な風雅観を以てしては、どうしてもそれを素直にうけ容れ難い気がする。けれども一茶の素朴な正直な感じ方の中にあるもの——雑草の中にぽつんと一本背の高い女郎花が生えているその姿は、やはり「あつけらこん」という表現でなければならない気がする。見たもの、感じたものをそつくりその儘表現している。それが一茶の「即興性」と称され、多作家・濫作家と謂われるところであろう。

いつも一茶は、見る儘、聴く儘、感ずる儘、何の滞りもなく、すらすらと詠んでいる。芭蕉の様に、自然をじつと見据え、自分の魂の底に沈潜して、はじめて句が生まれる、といつた様な態度でなしに、自然のすべてをその儘肯定して、全くありの儘の姿として、自己の詩境を打ち出しているのである。

今もしかりにそうした一茶の句を滑稽句と見做すならば、それはどういう点であろうか。「あつけらこん」という俗語を使用した点では芭蕉の「ひよろ〳〵」も同じである。両語の語義語感を比較してみたところで単にそのことだけでは摑めない。要するに「女郎花」が芭蕉の場合には「こけて露けき」景状として捉えられ、其処に女性的なまめ

かしさ、優しさ、つややかさなどといつたものを象徴しているのに対して、一茶の場合になると全然違うのである。本来女性的と目される「女郎花」が、其処では何の色艶もなまめかしさも感じられない、全く「あつけらこん」としたぶつきらぼうな姿に於いて捉えられているのである。

そこが一茶の面白さといえば云えるが、この様なものを単なる滑稽とより解しないならば、その真意を見誤るきらいが生ずるのではなかろうか。そしてこのことは、次の例で一層はつきりすると思う。

がさ〳〵と粽をかぢる美人哉（文化九年）

を芭蕉の「粽結ふ片手にはさむ額髪」に比較すると、下司と上品、卑俗と高尚、泥と雲、月鼈の差は明白であるが、芭蕉の様なとりすました美しさには、一茶は決して満足しなかつたのであろう。一茶の冷徹な眼が、そうした美人の内情をも暴露し剔抉せずには措かないのである。そしてそこに、人間を本来の自然の性情に還元してみていると云えよう。一茶の反逆は其処にある。彼が現実に眼前で見ているのは、まぎれもなくがさがさと粽をかじつている美人なのであつて、それをその儘、ありの儘に捉えているのである。其処に一茶の写生がある。伝統的な風雅の理想主義を打破して、新しい現実主義を打ち樹てた一茶の本領がある。

美人に関連して、次の一文を掲げてみよう。

閏二月廿九日といふ日、雨も漸くおこたりぬれば、朝とく頭陀袋首にかけて、足ついで、例の角田堤にかかる。東はほのぼのしらみたれど、小藪小家はいまだ闇かりき。（中略）。木母の鐘暁をつげて、又なく閑か也。花のあたりに魁の声あり。（中略）。そこにしばし休らひけるうち、又寝乱れ髪の塵もはらはで、楊子といふものに歯をすりつつ、ぬり下駄からからならして、あちこちさまよふさま、男十人もちたらんやうに、色々しくぞ思はれける。又坂の下より男五六人、糞たごといふものを枴（もふこ）の迹前にゆひつけつつ、葛西烏の鳴くやうにはなしもて来りけるが、程なく木陰に立ちかかりて、女のかたはら過ぎがてに、山神けしかる朝起よな。雨もやふりなんなどささやきけるを、女はやくも聞きとがめて、おのれいしくもいひつるもの哉。今一度さなののしりそ。しや首ねぢふせ、しや足打ち折らんなど、女に似げなきわろ口も、花の雪のちりぢりに吹きちりて心に留まるけはひもなく、是らも木間の春げしきとはなりぬ。

下々に生れて桜々哉　　茶

（我春集、文化八年、日本古典全書）

「七番日記」にもほぼ同様の文が見える。右は一茶が絶えず往還していた下総への行脚の朝、人けのない隈田川の堤に桜花を尋ねた際の所見である。中略の部分には、幕府の軍船の浮ぶのを見て「めでたき御代をあふぐとぞ覚え侍る」と云い、又、「木根に腰打ちかける」老法師を見て、「いかにもただ人とは見えざりけり」と云つている。茲には、暁の隈田川、満開の桜花、幕府の軍船、似而非風流人、更に美人と、次々に描出して来て、突然「糞たご」をかつぐ男らを登場させ、更に女の悪罵によつて切迫した場面を、「女に似げなきわろ口も」以下「花の雪のちりぢりに吹きちりて、云々」と、事もなげにさらりと文を結んでいる。一面一茶の女性批判とも見られるが、茲にも、一茶文学の現実暴露的性格と、野性味溢るる写生文の興趣が見られ、又「下々に生れて」の句にも、その階級意識が窺われる。

次に一茶の句作に於ける素材と素材把握の特色に就いてみるに、やはり頗る個性的である。天明以降の月並宗匠達には、素材即ち何を、如何に表現するかという問題の、何をが殆ど問題にならなかつた。彼等の殆どはただ伝統を墨守するのみで、ありふれた風流がりで満足していた。生活の現実の問題からは全然遊離した題材の中に逃避していたと云わねばならない。ところが一茶の場合は大いに異なる。句の中に生活があり社会がある。金銭のことはもとより、喰い気のことだろうが、何だろうが、凡そ旧来の伝統俳諧では禁忌とされた材料に対しても、容赦なく取り上げている。凡そ彼の生活の現実の中で、その眼に映じ、その心に感ずることはどんなことでも詩になるのであつて、而もそうした素材の把握の仕方も又頗る現実的である。それが伝統の基準からはみ出していて、俗俳者流からは奇異と感じられ、滑稽視され異端視され、排斥された点であろう。

夏衣いまだ虱をとりつくさず
蚤虱馬の尿する枕もと

これらは芭蕉の句にみられる蚤虱の類である。それらは云う迄もなく旅の痛苦を如実に物語る素材として把握されている。しかるに一茶の場合はどうであろうか。

あら玉の年立返る虱かな（文化五年）
盃に蚤およぐぞよおよぐぞよ（文化八年）
よい日やら蚤がをどるぞはねるぞよ（文化十年）
我が味の柘榴に這はす虱かな（文政三年）

に見るように、蚤虱蚊蠅等の蟲けらどもは、彼の場合全く日常茶飯事であり、それらは痛苦の対象どころか、寧ろ彼の苦悩を慰める対象として、云わば彼の自慰的玩具であり、生活必需品の観がある。こうしたところにも一茶の「滑稽味」があると云えようが、その本質はやはり「野性味」にあり、孤独と劣等感とに常に悩み続けていた一茶の自嘲や自慰の表現であり、且つ又、都会人的美意識に対する地方人的反逆としても見られるであろう。

下〳〵も下〳〵下々の下国の涼しさよ（文化十年）

一体こんなものが俳句と云えるだろうか。在来の俳句、少くとも芭蕉が正風俳諧を確立して、風雅の誠というもの

を伝えて以後の伝統俳諧の観念からするならば、凡そこの様な蕪雑な観念的辞句には何人と雖も顰蹙せざるを得まい。「ゲゲもゲゲゲゲのゲ」等という醜悪な音感には、如何にもとげとげしい感情が露骨に現われている。そして其処には、云う迄もなく「上々の上国」たる「江戸」の虚飾に満ちた生活に対する敵意が窺われる。同時にそれは、

雪行け〳〵都のたはけ待ち居らん*（文化十年）

と詠んだ「都のたはけ」を嘲るものであり、蕉風俳諧百年の伝統墨守の中にいつかさびついた陳々腐々たる似而非風雅のとりすました風流がりの俳匠どもを痛烈に罵倒している様な気さえする。**

芭蕉翁の瞻をかぢって夕涼（文化十年）

という句を、芭蕉の亜流を以て自任する作者自身が、みずからを反省しているものとして解釈するのが通説であるが、この句にしても、彼が自らをいましめ鞭うつ気持だけではなしに、口に風流を称えながらその実、何等風流の本質を弁えない世の宗匠どもを暗に鋭く揶揄し、叱咤していることも見逃し得ないであろう。

* 類句に「名月や江戸のやつらが何知って」というのがある。江戸人の非都会的なものに対する極端な軽蔑を、長年受け続けていた一茶の、地方人的劣等意識による烈しい反撥とみられる。

** 文政二年、彼が太邱に宛てた書簡の中に、如何に彼が当時の中央俳壇に対して強い不信の念を抱いていたかということが、はっきりと解るものがある。（山口剛「西鶴成美一茶」、一茶書簡抄参照）

3

一茶の芸術は、一茶という人、一茶という人間が歩んで来たその生活の中にある。従つて、その作品が、彼の生きた時代と環境の中に正しく位置づけられ、それが彼の全人格的表現として取り上げられる場合には、その強烈なる個性は、その儘吾々に強く訴えて来る何物かを齎らすのであるが、それが一たびその人から切り離され、その生活が考えられない場合には、その表現のまずさ、そのあくの強さ、その荒けずりの芸術には、多分に批判の余地を残しているのである。

その点から云うならば、一茶の芸術は「落第生の芸術」などと評されても不思議はない。しかし、落第生には落第生でなければ出来ないことがある。一茶はそれを見事にやつてのけている。つまり優等生には決して真似の出来ない持味を生かしている。けれども、吾々が優等生を基準にしてものを云う場合、又は優等生がそれを評する場合、それらが屢々滑稽視されるのであろう。

之を要するに、一茶の「滑稽味」には、談林俳諧の「暴露的な穿ち」にみる庶民性を継承しながらも単なる智的遊戯的な「興がり」に終始せず、一方、蕉風俳諧に於ける生活体験的個性的なをかしみの美を受け継いでいるのであるが、所謂中世的伝統的乃至高踏的傾向には強く反撥を示しているのである。一茶の芸術は、これを芭蕉や蕪村のそれと比較する時、その平俗性は否定すべくもない。しかし、一茶という人間が、封建末期の頽廃的な町人文化の爛熟した社会環境の中にあつて、所謂都会的なものや、種々の権力に対しても屈従せず、その抑圧された生活感情を皮肉や諷刺の句に託したこと、而もその「滑稽味」にみる頗る現実的生活的な傾向には、明らかに時流にぬきんでたものがあり、或る種の反逆というか抵抗の精神といつたものが窺われ、その点、興味ある諸問題を包蔵している様に思われる。

（小稿は夏季講座に際して纒めた草稿の前半の部分である）。

受贈誌（31・7〜32・2）

日本文学	八—二月号	日本文学協会	秋田国語国文 第一号
国文学	第一巻四—六号	学燈社	横浜大学論叢 第七巻第一・二号
国文学	第二巻一—三号	関西大学国文学会	明治学院論叢 第四二—四四輯
日本文芸研究	十六	日本文学院大学	文学部論叢 第六号
近世文芸	第八巻第二号	関西学院大学	文学論藻 第五号
万葉	第三号	日本近世文学会	駒沢史学 第五号
語文	二〇—二二	万葉学会	大隈研究 第七輯
女子大文学	第四輯	日本大学文学会	社会科学討究 第一巻第二号
女子大国文	国文篇九号	大阪女子大学	国立国語研究所報告 第二巻第一、二号
文学史研究	第四号	京都女子大学国文学会	国立国語研究所年報六（二九年度） 十
文学思潮	二—五	文学史研究会	善本写真集 七・八
国語学	十九・二〇	「近代文学」大阪研究会	ビブリア 六
国語	二五—二七	国語学会	ROMAZI SEKAI 四九四—五〇一号
	第四巻第四号	東京教育大学国文学会	秋田国語国文会
			横浜市立大学学術研究所
			明治学院大学文経学会
			立正大学文学部
			東洋大学会学国文学会
			駒沢大学史学会
			早稲田大学社会科学研究所
			〃
			国立国語研究所
			〃
			天理図書館
			〃
			日本ローマ字学会